



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

博多の歴女 しらこまひとみ 白駒妃登美

母親としての明確な基準

——本居宣長を輝かせた女性たち①

✿ 宣長への感謝の思い

私は、江戸中期に活躍した国学者・本居宣長のりながに、とても感謝しています。なぜかという、私は『万葉集』や『源氏物語』を通じて日本の文学や文化に関心をもったのですが、これらの作品の価値を現代に伝えてくれたのが、彼だからです。

例えば、『源氏物語』は今でこそ世界に誇る日本の名作ですが、その本質である「もののあはれしみじみと感じ入る心」の価値を掘り起こしたのは宣長なんです。

平安時代末期には武士が台頭し、男らしさが求められる時代がきました。ですから日本人にとって「もののあはれ」という感性は女性らしさ、もつと言えば女々しさとして理解されるようになっていました。しかし、日本文化の神髄しんすいは何かといえは、私は男性的な雄渾ゆうこんさをも包み込む、母親の



本居かつ 江戸中期の国学者・本居宣長の母。結婚後に1男2女をもうけ、夫の死後の宝暦2(1752)年、宣長を京都に遊学させ、医学を学ばせる。後に尼となり、恵勝と号す。

【イメージイラスト】
アオジマイコ

ような「たおやかさ」や「しなやかさ」、そしてその源流にある「もののあはれ」こそ、日本の心の原型だと感じています。

また、今からおおよそ千三百年前に編纂された『古事記』を読み解き、『古事記伝』を著したのも、宣長です。『古事記』は、中国大陸から伝わってきた漢字を大和言葉の音に当てはめて書かれたもので、漢字自体に意味はありませんから、とても難解なのです。それを見事に読み解いたのは、宣長の金字塔といえるでしょう。

✿ 酒はおちよこで三杯まで！

今回の主人公は、そんな宣長を育て、輝きを与えた女性、母親のかつです。

数年前、私は三重県松阪市の本居宣長記念館を訪れたのですが、そこには、かつからの手紙が展示されていました。実は、彼